

明治・九谷焼の名窯・作家

～ 日本の伝統的美意識や技法を引き継いだやきもの ～

綿谷平八 [1837-1883年]

1858年、寺井で父の家業を継いで陶器商人となりました。江戸末期、小松の行商人が各地へ副業的に九谷焼を販売したのが能美地方における九谷焼の県外販売の始まりです。当時、寺井では九谷庄三ら名工が多く、九谷焼が産業九谷として確立しようとしていたので、綿谷も京都、大阪、岡山、肥前へ出向いて販路の拡大に励みました。そして、1860年、自宅に絵付工場を建て、吉田屋風、赤絵、彩色金欄手、錦手などを制作し、江戸にまで出向いて販売しました。1869年、実兄・平四郎、若杉弥助らを瀬戸、美濃、有田に派遣し、それぞれの製法を視察させました。翌年、弥助が長崎から酸化コバルトを、市松が絵付用の洋絵の具を持ち帰り、それらをもって美しい製品を作り、内外に販売したところ好評を得ました。その結果、1873年のウィーン万国博覧会、1876年のフィラデルフィア万国博覧会に自家製品を出品して名声を得ました。

綿谷平兵衛 [1864-1921年]

綿谷平八の子で1882年、横浜に支店を出し九谷焼の貿易商として各国と盛んに貿易し、国産である九谷焼の真価を内外に高めることに努めました。特に、九谷焼と並べて香々焼（詳細不明）と称する新陶器を創作し、国内は言うまでもなく、スペイン、アメリカ（シカゴ）、ポーランド、ベルギーなどの万国博覧会で、金・銀牌を受賞しました。一方で、1906年、井出 善太郎、石崎蕃らと九谷原石破碎会社を設立し、1908年から寺井町湯谷で操業を始め、九谷焼の産業基盤を築くのに貢献しました。